

道元における聖と俗(三)

— 懺悔の問題を中心に —

西山 宣

一、宗教学的概念規定を行う重要な要素としての聖と俗を考へる上でさらに重要なことは懺悔ということである。ここでは特に懺悔ということが道元に於いてはどのような意味を持ち又世界宗教の一つであるキリスト教ではどのような意味を持つているか道元に於ける聖と俗を考へる中で考察してみたい。各主要な宗教には懺悔ということが考へられ、仏教に於いても当然無視されて良いというべきものではない。すなはち懺悔とは懺という梵語の音と悔という漢音とを重ねた梵漢兼拳の語といわれている。懺は懺摩の略であり、この語は梵語の Ksama クシヤマを音訳したものである。Ksama クシヤマとは「堪え忍べ」「ご免なさい」ということであり、相手に謝罪を求める言語である。であるから本来何が悪いことをした時に、その場で相手に向つて謝罪するという対人関係のものであつたと考へられる。このことから自分が過去に犯した多くの罪業は謝罪すべき直接の相手が求められないので

自分の心に深く反省し慚愧して、仏祖や尊信する師長に対して罪業を謝して懺悔の誠を致すというようにその意味が次第に変化してきたものと考えられる。すなはち懺悔は信仰に入るための予備とも考へられるが、しかし懺悔の態度が信仰そのものとも言えるので懺悔の心が生じた時すでに仏教の信仰に入つているとも考へられる。しかし善悪を認めず、その報果を否定するような邪見があつては、良心的な慚愧の心の起る余地がなく、誠心懺悔ということもあり得ないことになる。そこでまず自分の過去の罪業を罪業として認め、(例へば過去の罪業のため肉体的、精神的懈怠—精進の反対—の気風や不信—淨信の反対—の状態)罪業にはその報果がかならずあるという因果の道理が正しく知られていなければならぬということになる。このようにしてより高い倫理道德の理想をもつようになればその過程において過去の誤つた行為の結果生ずる自分の多くの欠陥に気づき深く反省し慚愧するようになる訳

である。仏教に於いてはこれらの誤つた行爲は無明執着より生ずるものと考えられ世俗の欲情や執着は過患を招きこの執着欲情をはなれることが理想的平和への道であると考えられる。このようにして人間は自我の執心をはなれることにより、かたくなに結ばれた心は次第に解け開けてくる。このことが道元に於いては誠心を専らにした懺悔と考えられる。その和らいだすなおな心で、己れを空しゆうしている処で仏教の教説を学ぶならそのまま受け入れられ、仏教への理解と信仰とが生じ確立し、絶対帰依の心が生ずることになる。この絶対帰依の信仰を淨信と道元によつては考えられている。すなはちこの淨信とは清淨なる信心であり、仏教の正しい信仰をさし、その懺悔の功德として、不信や懈怠が除かれ、何物にも妨げられない無碍の淨信や精進の態度や氣風が生長するものと思われる。ところでこの淨信の原語は梵語では *Pisāda* ブラサーダといい、「淨信」「信樂」「欣喜」等と訳され、心が清らかに澄み、明朗でうるわしく、静かな喜びをもつた信仰の状態、すなはち信心歡喜の状態をさす。したがつて道元に於いては淨信が最も大切と考えられ、それは誠心の懺悔によつて得られると考えられる。この淨信が現われることにより自他共にその心に入らねば起る。それだけでなくその利益は有情から非情へまで及び、ここに於いて草木口土悉皆成仏とか有情非情同時成道ということが言われ、それは淨信に

よる悟りの境地に於いてのみ言えると考えられる。したがつて懺悔は入信と同義語とも見られる。これにより我々の心は従来の自然心、本能心、世俗心からの廻心の転回をなすと考えられる。しかし無条件でこの慈門に入れるのではなく道元に於いては坐禪によつてこの門に証入するとされるがその坐禪は己れを空しゆうした非思量の坐禪であり、身心を投げ出した身心脱落こそが今ここで考えている懺悔によつてこの門に証入することであり、それは己れを空しゆうした誠心の懺悔であり、無碍の淨信による懺悔である。この無碍の淨信によりいはゆる信仰の慈門に入るとされると考えられる。ここに於いていかに重い罪でも、この懺悔の力により輕減し又は滅除して清淨無垢のものとすることができるといふことを道元は

「然あれば誠心を専らにして前仏に懺悔すべし、恚麼するとき前仏懺悔の功德力を抔ひて清淨ならしむ、此の功德能く無碍の淨信精進を生長せしむるなり淨信一現するとき、自佗同じく転ぜらるるなり。其利益普く情非情に蒙らるしむ。云々」と正法眼藏谿声山色の卷に言つている。すなはちいかなる重い罪でもその心が重罪を重罪として受けることに懺悔を通して決着し觀念するならば罪をかくしのがれたいとする執着からくる心の不安や苦しみは除かれる。この懺悔によつて主観的な安心がえられ、それによつて罪業の輕減となり、

さらに主観的な心の改変がやがては客観的な身心環境の改変となり、その働きによつて客観的な罪障消滅ともなると考えられる。したがつて誠心を専らにして心を空しゆうして身儀を正し、過去の罪過、悪業をさらけ出して告白懺悔し、その懺悔する力が過去の罪惡の根元を断ち清滅することと考えられる。心地觀經三には懺悔の功德について次のように説かれている。

「若し能く如法に懺悔すれば、所有煩惱悉く皆除く、猶お劫火の世間を壞するに、須弥并びに亘海を焼尽するが如し、懺悔は能く煩惱の薪を焼く、懺悔は能く天路に往生す、懺悔は能く四祥の樂を得、懺悔は宝摩尼珠を雨ふらす、懺悔は能く金剛の寿を延ばす、懺悔は能く三界の獄を出づ、懺悔は能く菩提の華を開く、懺悔は仏の大円鏡を見る、懺悔は能く宝所に至る云々」このことからしても懺悔はあらゆる業障や煩惱を滅することからはじまり大円鏡智を得るまでの種々様々な功德を持つてることが理解できる。しかしその基本としては前述のように誠心を専らにして前仏に懺悔することにより罪障を軽減又は滅除し、無碍の淨信を得ることが第一と考えられる。すなはちその心が淨化し、無心であり、執着をはなれることにより一切の罪障もその力を得ることではできなくなるのである。いはゆる吾我の執着心を去ることによつてその心を淨化することができそれにより正しい信仰に入つてゆ

くことができると考えられる。

二、さてこの懺悔の意味をさらに良く理解するためにキリスト教に於けるそれを参考に考えてみたい。米倉充氏によれば「最も具体的で歴史的な姿像として啓示されたのがイエス、キリストの十字架であり、その十字架において神の子が卑賤の姿像をとり、十字架で死すことにより人類を神と和解させ、その罪の絶望状態から救出し永遠の生命に入る新しい自由を回復された。」この一見背理に見える真理内容が聖書で言われる福音である。それは人間の現世的権力から見れば敗北であり、文化価値から見れば醜惡で忌わしい十字架が実は人類の希望と新生の根柢であるという真理と告知するものであると考えられる。かくしてこの十字架の前では一切の地上的権力、理性的文化価値の類は塵芥のように雲散霧消し、この世に於いて価値のないもの、力を持たないものとして貶下され、無視され、抹殺されたものがその虚無のどん底から新しい脚光を浴びて起ち上がる。ここから生じる新しい価値復活の生命、これをキリスト教では「永遠の生命」又は「新しい世界」と呼んでをり、これは般若心經のまさしく不生不滅の世界とも同じように考えられる。このような「価値の転換」、人間の死と絶望を通じての新しい生と復活、この力強い転換をもたらす原理をキリスト教では愛(Agape)と呼んでいるのである。私は以前にこのことを関与の原理として見当

を加えた。従つてキリスト教の愛は決して人間的なものから自然発生したのではなく、むしろそれは超越的な上から降下する絶対の光明であり、神からの賜物に外ならないと考えられている。というのはキリスト教に於いては神は愛そのものであり、この神の愛、恩恵に応えるのは人間の理性的認識、道徳的精進ではなく、それら一切の人間の営為は、結局神の前には無力であり、空虚であり、その愛を受けるに値しないような存在ですらある。したがつてキリスト教に於いては我々人間は神の前ではひたすら自らを謙虚に悔い改め、この絶大な愛を受容する以外の道はないと考えられる。この絶対的受容の態度こそキリスト教的信仰と呼ばれるものと考へられる。愛といふ信仰といふ言葉は相違しても、これは結局神の愛の二側面を語るものであり、そしてそれは神の側から見れば愛であるが人間の側から見れば信仰と呼ばれる。結局キリスト教に於いては愛も信仰も、神の恩恵の賜物に外ならないのである。米倉氏によれば信仰の対称となるイエス・キリストについての背理 (Paradox) —すなはち歴史上のある特定の場所と特定の時間に実在した一人の人間、しかも地上で最も恥辱に満ちた十字架の死を遂げた一介の大工の子を人類の救世主、神の子であるとしてこれを信仰し礼拝する—について次のように考へている。「真理には客観的、対称的認識の外に、それ以前により実存的な認識に由来する主体的真

理、あるいは出会いの真理と呼ぶべき真理が存在する。例へば私たちが人間にとつて不可避的な宿命ともいふべき死の問題を考へてみよう。死程私たちに身近で普遍的なものはない。実は我々の生きている事態そのものが死につつあることにならぬ。すなはち死は対象としてあるのではなく、わたしたちの自覚の場としてある。そしてこのような場の自覚において把握された真理が主体的真理と呼んでもよいものである。イエス・キリストがわたしたちにとつて救世主としてあることは決して客観的、対象的な意味での真理ではなく、むしろ主体的、実存的自覚の立場における真理であり、それは客観的、対象的な倫理においては明らかに背理、不合理であるが、私達の主体的、実存的な自覚においてはこれ以上の必然性、決定性は考えられない絶対的な真理である。この故に使徒パウロも『十字架の言は滅び行く者には愚かであるが、救にあずかる私達には神の力である』と断言している。かくて私達にとつて主体的な出会いの真理とは第三人称のそれ、あるいは物として対立するものではなく常にわたしたちにとつて第二人称のなんじとして相互主体的に語りかけ、要求し、召請して来るものなのである。従つてかかる真理に対するわたし達の態度は傍観者流の「認識」ではなく「容認」でなければならず、かかる要求に対する私達の応答は常に中性的な「観想」ではなく「あわか—これか」の二者択一の「判

断」でなければならなくなる。かくしてイエス・キリストが教主であることは、普遍妥当的な科学的客観的認識における真理ではなく、主体的実存的自覚における出会いの現実における真理と考えられる。かくしてキリスト自身が「わたしはよみがえりであり、命である。私を信じる者は、たとひ死んでも生きる」と語り、信仰者の実存にとつては、イエス・キリストが私達の存在根拠であり、生命の源泉、真理そのものとなる。

三、従つてこのような出会いの真理においては時空の隔絶は問題とならず、我々とイエス・キリストわれとなんじの相互主体的な出会いをなすとき二〇〇〇年の時間の距離はあつても一元的に私達がイエス・キリストと同時的に彼の人格と連なることにより、人間の最も根源的な虚無と永遠の「死に至る病」である罪と絶望から解放されるのである。すなはちキリスト教は十字架上に死して甦つたイエス・キリストを主・救主・神の子として信仰し、礼拝する宗教であり、ここにキリスト教の特質を見出すことができるのであるが、さらにひるがへつて仏教について考えてみるならば、得悟成覚を成じた仏陀によつて見出された普遍的真理としての法と帰依する我々との帰依三宝とは、ここで道元を焦点をしぼつて述べるならば前仏に懺悔することによつて自分と法と仏とが一元的に一体になり、自分が仏にいだかれ仏と感応道交するこ

とによつて始めて仏教における懺悔の意味も理解されると考えられる。例へて言うならば諸行無常ということが言われるが、その諸行無常に気づきその諸行無常と一つになればもう諸行無常ということはなくなる。いはゆる不生不滅の世界であるが、この主体的、実存的自覚における出会いの現実における真理こそが、仏教、キリスト教に共通の真理と考えるのである。すなはち仏、法、僧の帰依三宝と、父なる神、イエス・キリスト、聖霊の三位一体は歴史的、概念的、形式的に相違があろうとも本質的には一つのものであると考えてさしつかえないと考える次第である。

(紙数の都合上、注消略)